

「インドにおける母と子の健康管理」に参加して

足立区立第四中学校 池田 正司

1. はじめに

アースウォッチと出会う前に、私は23年前に青年海外協力隊でネパールに2年間のODAでのボランティア活動をした経験がある。その滞在中にヒンドゥー教のカースト制度の外に存在する不可触民の存在に強い衝撃を受けた。帰国後、ネパールでの階級差別、幼児労働等について関心を持って学習会に参加してきた。その中でインドに今でも不可触民が数多く存在し、不当な差別や処遇をされていることを知った。何気なく手にした花王教員フェローシップ募集要項のプロジェクト・リストの中に不可触民の多いタミール・ナドゥ州の母子を調査するプログラムを見つけ、「これが20年来、待ちに待ったものだ。」と勝手に参加できると決め付けた。すぐに、課題論文を書き上げて応募し、幸運にも今回の参加が決まった。

2. プロジェクトの背景と生い立ち

世界第2位の約11億の人口を抱えるインドの南部に位置するタミール・ナドゥ州は、特に不可触民（ダリット）の占める割合が大きく、子供の半数以上が栄養失調に苦しみ、女性の60%が貧血症にかかっている。栄養失調は脳の発達を阻害するため、生産社会の骨組みが深刻な悪影響を受けることになる。さらに、教育を受ける機会に恵まれない農村部では公衆衛生に関する予備知識に欠け、情報伝達が遅れ、たびたび消化器系の伝染病が大流行することがある。また、近年の経済発展に伴って、物資と共に人間の往来が盛んになり、世界中での流行が懸念されているHIV／エイズのインド各地への感染拡大が大きな社会問題になっている。

そこで、州都のチェンナイに市民が公衆衛生に関する知識を持つ目的で、ニティア・バラジ女史とこれらの問題に取り組む同志たちが、タミール語で「お元気ですか？」という意味のNGO団体「ナラムダナ」を10数年前に共同で設立して活動を始めた。

3. プロジェクトの概要とボランティア活動

① ナラムダナ活動の3つの柱

- ・ 農村部を巡回し、地域の婦人団体と協力し、公衆衛生とエイズ感染防止の教育を盛り込んだ街頭劇を上演するイベントで市民の知識や意識の変容を調査する。
- ・ 都市部のデイケアセンターを巡回訪問し、資金援助で進めている栄養補給の成果を見るために、抽出



によって身長と体重の測定を定期的に行う。

- ・ 都市部の公立中高校や短期大学を訪問し、女子を中心にエイズ感染防止の講義を行い、性意識に関する調査を行う。

② プロジェクトにおけるボランティアワーク

- ・ ナラムダナ活動の生い立ちや設立趣旨を知り、農村部での地方巡業や都市部でのデイケアセンター・中高校・短大への訪問の目的と内容をしっかりと理解した。
- ・ 地方巡業にスタッフと同行し、街頭劇の上演前後に公衆衛生やエイズの知識と意識調査をスタッフの通訳を交えてインタビュー形式で行い、変容を分析した。また、街頭劇の前座として、現地語の馴染みの歌をボランティアで歌い、さらにヒンドゥーダンスとチャンバラをミックスした寸劇を女優と日本人2人で演じた。
- ・ 保育園児に歌やお遊戯を英語で教え、お絵描きの色使いなどを一緒にやりながら教えた。また、先生方には折り紙や切り絵など子供の創造性を育む教材の作り方を個別に教え、交流を図った。
- ・ 学校では英語で自己紹介を行い、日本文化紹介の一つとして日本語の歌を披露し、折り紙を個別に教えて全員に作らせた。

4. ボランティア活動の成果

- ① ナラムダナという民間NGO団体の地道な活動が地域に根ざした形で定着し、スタッフへの研修によって街頭劇のレベルを維持し、活動範囲を拡大してエイズ感染者の増加を食い止めているという実績を上げていることが分かった。
- ② 街頭劇の前座で披露した歌や寸劇が、子供から大人までの多くの現地の聴衆に熱狂的に受け入れられ、予想以上の集客力を上げることができた。
- ③ デイケアセンターに日本から画用紙とクレヨンをお土産に持ち込み、保育園児の興味・関心を高め、大変友好的な雰囲気の中で子供や先生方との交流ができた。
- ④ 学校では、日本語の「うみ」を歌い、日本は東にある島国であることを教え、日本的な折り紙の「かぶと」「つる」を折りながら、日本の紙工作の素晴らしさを教え、少なからず日本に興味を示してもらった。



5. ボランティア活動で得たもの

- ① 特別な事前研修を受けず、専門知識を持たない自分が、途上国の現場で問題解決に真剣に取り組む専門家・スタッフ・ボランティアと英語で会話し、調査活動等を行い、討論するという非日常的な時間と空間の中で2週間の体験活動をやり切った。
- ② アースウォッチの他の野外調査プロジェクトとはだいぶ趣きを異にする当プロジ

ェクトに参加して、インド人の多様な価値観や社会構造的な問題点など「インドのいま」を体感し、カースト制度の残る社会の深刻さと発展途上国の教育現場の実情を垣間見る事ができた。

- ③ 多国籍で異年齢なボランティアが集い、共同作業や共同生活を行う中でお互いの国々の生活習慣や文化や考え方の違いを実感し合い、自然な形で国際交流ができた。また、その素晴らしさを実感できたと同時に、英会話が大きなコミュニケーション能力の武器であることを痛感した。
- ④ 今回のボランティア体験の中で、非日常的な数々のことをやる機会に恵まれた。その過程で大きく自己実現が図られ、新しい自分の可能性に目覚める事ができた。
- ⑤ 今回のボランティア体験は、日本での数多くの方々の手助けと、現地での専門家、スタッフ、ボランティアとの友好的な関係が全て上手くいって完了する事ができた。改めて、地球人というグローバルな視点から世界中の人々が互いに理解し合い、互いに助け合うことが大切であることを強く感じた。

6. ボランティア体験の学校教育への還元

- ① 生徒の学習に対する真剣さは、インドの子供たちに見習う面が大きい。日本の生徒にも基礎学力の定着のための暗誦や反復練習など労を惜しまずに真剣に努力する姿勢を身に付けさせたいと思った。
- ② 学習を何のためにやるかという目的意識と将来の自分の夢をしっかり抱かせる学習指導・進路指導にも力を入れていかなければいけないと強く感じた。
- ③ 多くの人口を抱えるインドの環境問題から、ごみ処理・飲み水・エネルギー・大気汚染・水質汚濁などの課題を見つけ、いろいろな面からアプローチし、日本の現状と問題点を比較する事で総合学習や理科・社会の授業等が展開できると考えている。



7. 終わりに

2週間のボランティア体験を終えて、今でもインドでの楽しい思い出が蘇って来る。自分がボランティア仲間と生活し、専門家・スタッフと調査活動をし、住民と交流できた事が本当に事実だったのか？夢の中での摩訶不思議な世界での異次元体験であったのではないか。今まで体験したボランティア活動では味わえなかった「地球のいま」を体感できたのはアースウォッチのおかげである。自分の世界観と人生観を一変させたと言っても過言ではない。帰国後、身のまわりの人々や物への見方や考え方が明らかに変化した自分を感じる。アースウォッチのボランティア体験に人の心構えや行動を変える魔力があるのだろうか。今、少しずつ写真や資料を整理しながら、今回の体験を大切に振り返っているところである。まだ少し、魔術にかかった楽しい日々が続きそうである。